大同工大同窓会報

発行所
大同工業大学同窓会
名古屋市南区
大同町２の21
TEL(611)0511～6

印刷所
栄印刷株式会社

創刊号

未来への飛躍

同窓会会長　山野清市

ここに大同工業大学同窓会会報創刊号を発刊するにあたり、同窓生の皆様にご挨拶申しあげます。

本校は、故錦織清治学長が、わが国産業界における技術革新の機運と、中部地方の産業界の発展による技術者需要の増大に応ずるため、昭和三十七年大同工業短期大学を設立し、昭和三十九年三月に第一回の卒業生八十三名を誕生させました。そして現在では、同窓生も早や八百名以上になり、中部産業界を中心に、京阪神工業地帯など広く全国にまたがって、日夜仕事にはげんでいるものと信じます。

しかしわれわれは、現在まだ社会の下積みであるかも知れません。このことは、今の同窓会にも同じことが言えます。しかし、われわれはまだ若く、洋々たる将来があります。故錦織学長が第一回の同窓会総会で次のように述べています。"現在の大同工業大学同窓会は、小川のせせらぎのようなものである。しかしこれが、十年、あるいは二十、三十年先には、支流となり大河となって、工業、産業界の主流になるだろう…"と。

一九七〇年代は、技術革新の波が一層はげしくなると予想されます。宇宙開発、海洋開発が急速にのび、それに附随した一般の工業技術も一段とレベルアップされそうです。またコンピューターについてみても、どちらかといえば、今までは、一部専門家だけのものであります。多くの人は、それについて一般的な常識をもっていればよいと思われてきましたが、今後は、動く人すべてが、自分の仕事をコンピューターにのせなければ、仕事が出来なくなるという事態になってくるかも知れませんし、事実、こういう時代の動きをひしひしと感じるようになってきました。

このような技術革新に対処するため、大同工業大学も、創設当時に比べ、大幅に設備も整い、日々発展しつつあると聞きます。また、一部の同窓生を中心に、各自の技術能力の開発と、産業の発展に貢献することを目的に、"大同技術協会"が、具体的にスタートしつつあります。同窓会としても積極的に応援し、永続したいと念じます。

今後、会報は毎年四月に発刊する予定ですので、皆様方の積極的なご寄稿をお願いします。

大学の近況

本学卒業生、すなわち同窓仲間は昭和三十八年の短大第一期生、および四十二年の単科大学第一回卒業生を送りだして以来、現在までに約八百名と同窓生はふえ、中部地域を中心とし、阪神、京浜の各地域や海外への就職というように、広範囲にわたり産業人として活躍しております。

故、錦織学長および大同としての目標である「産学協同」という地域の産業開発と技術者養成に力を注ぎ、実験工業大学として、特に卒業研究など、少数の学生によるマン・ツー・マンの全人教育によって「汗と愛」の精神の通い合った教育を通して"自主と堅実"の学風をとっています。

本学は設立以来、機械工学科、電気工学科の二学科からなり、燃焼工学研究所、関口溶接研究所、大同カラー・センター、産業衛生研究所等が付設され、ここでも各産業界に貢献しております。

一昨年の夏、長野県木曽福島の木曽駒カントリークラブの奥に建坪九十一坪、収容人員五十名が宿泊出来る「大同工大・木曽駒ゼミナールハウス」が完成し、指導教官と学生との会合、卒業研究グループごとの合宿、各サークル等の合宿ゼミというように、本学のように特に公害になやまされる都市の俗塵を離れ、青空、緑の山々の中での合宿、ゼミナールは学生の絶評を得ております。なお、同窓生にも開放されておりますので、皆様がご利用される際は大学事務部・学生課にお問合わせ下さい。

大学は序々に整備され、現在大学本館の西南（旧高校クラブ等）に鉄筋コンクリート造西隣棟の二号館建設が進んでおります。工期は四十五年八月～四十六年二月の予定で行なわれ、九月上旬にくい打ちがほぼ終了し、来年度の新学期を迎えるために着々と進められております。この建物には機械科の研究室および実験室がおかれるほか、卒業研究のための研究室や学生ホールなどが増設されることになっております。

この二号館建設に関して、さる七月十日・十二時二十分より一〇一教室において学生と学校との間に大衆団交なる事件が発生し、学生側から"二号館に休憩、談話の場を設ける"事項をはじめ十一項目の要求を出してきました。しかしこの事件が学生と学長および諸先生との間に精神の通った話し合いの後、無事解決しました。

このような事件を通して学生と教官との間に親密感が増し大同工業大学としてさらに一歩一歩前進しております。

創刊によせて

成田米蔵

この度、同窓会会報が創刊されることになり、ご同慶にたえない次第であります。私はかつて本学の同窓会に出席して、学校の卒業生が社会で活躍するには、同窓生とのつながりが大切なものであるということを話したことがありますが、卒業生の皆さんが年齢も進み地位もともかって、大切な仕事をされるようになりますと、同窓生とのつながりは大切なものであり、有難いものであるということを、身をもって悟られるようになるものと思います。なお、人間は社会的動物といわれる通り、一人だけでは暮せないものであって、殊に私どものように年齢が進んで参りますと、旧友が一入懐しくなるのであります。

卒業生としては母校の様子も知りたいでしょうし、同窓生の動静も知りたいことは思われますので、会報が発行されることは、本当に嬉しいことと思います。

本学も短期大学が創立されてから早くも八年余、四年制の大学となってからも既に六年有余の年月を経ました。短期大学において二回、四年制大学においては四回の卒業式が行なわれ、卒業生の数も順次多くなりつつあります。

同窓会が今後ますます発展し、会報もいよいよ充実されることを期待する次第であります。なお、この機会に大学の状況をご紹介しておきたいと思います。

施設設備の面では、本館および実験実習棟が完成した後は、学生クラブハウスの建築、簡易グラウンドおよび倉庫の設置、学生自習室、食堂および木曽駒ゼミナールハウス等の建設を実施いたしましたが、本年度については、正門西側の老朽木造校舎を取り毀し、鉄筋コンクリート四階建ての校舎を新築し、実験室、講義室、研究室等を充実する計画を立て、実施中であります。これによって環境もかなり整備されることと思います。

以上の通り本学も次第に内容を充実してきましたが、今後もまだ為すべき事柄が沢山あります。学園として大いに努力しなければならないのはもちろんでありますが、卒業生のかたがたの強力なご援助を得たいと思っています。皆さんのご健闘で発展を祈る次第であります。

新任ご挨拶

大同工業大学後援会長　金田安之

初代会長小野さん始め竹川会長猪村会長、この御三方を中心として貴様方共々数多くの偉大な業績を残された歴代の名会長の後を受けました新任の金田でご座居ます。浅学非才の者ですがしばらくの間後援会長という名前に籍を置かせて戴きます。重責を引き受けました以上は私達の大事な子息のよりよい教育向上のため、前向きの姿で大学当局の方針を始め皆様方ご父兄のご希望事項の一つでも多くまとまるよう、陰ながらお手伝いをして行きたいと、こんなように考えている次第です。

どうか前会長同様ご指導ご協力のほどお願い申し上げます。

この後援会を人と人の和を持ってますます発展するよう運営していきましょう。

本年度は一九七〇年代の幕明けとして現在ではあまりないようですが、昨年度全国的に行なわれた学生運動が本校では今まで一度も大衆に迷惑を及ぼしたことはございませんでした。誠に喜ばしいことです。

おのおのの意思表示は自由でしょうが、あのような暴力的な行動に出ないよう私たち父兄も愛情を持って相談に乗り指導して行きましょう。

せっかく選定して入学した名門大同工業大学ですから当面の大学生の本分である勉学に努力し、この四年間希望する研究に専念され一人の落伍者もなく卒業され、先輩に負けないような有能な人材になられ、社会のため、職場のため、しいては自分のためになるよう希望する次第です。

まとまりのないことを申し上げましたが就任のご挨拶とさせて戴きます。

胸像完成間近

昨年の六月、初代学長錦織清治先生がご逝去され、今年の三月在学生を中心として胸像事業会が設立され、同窓生の皆さまにもご協力をお願いしていましたが、完成間近となり、十一月吉日をもって除幕式を取り行なう運びとなりました。これも偏えに同窓生皆さまの方のご協力のたまものと感謝しています。

この胸像は、県立芸大の野々村先生がご逝去され、今年の三月在学生を中心として胸像事業会が設立され、同窓生の皆さまにもご協力をお願いしていましたが、完成間近となり、十一月吉日をもって除幕式を取り行なう運びとなりました。これも偏えに同窓生皆さまの方のご協力のたまものと感謝しています。

胸像の設置場所は、本館東玄関西に建設される予定です。

皆さまがご来校の節には、ぜひこの像をご覧になり、故学長の遺影を偲んでいただきたいと思っております。

最後に皆さま方のご協力に対し感謝しつつ、このことを報告いたします。

第６回大同工大総会ご案内

秋色さらに濃まり、朝な夕なに冷気を感ずる今日このごろ。会友の皆さまにはお元気でご活躍のほど、お喜び申し上げます。

さて、恒例の昭和45年度同窓会総会を右記のとおり開催致します。皆さまお誘い合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。なお、当日第１回大同技術協会総会も開かれますので重ねてご案内申し上げます。

日　　時　昭和45年11月15日（日）
午後１時より

会　　場　都ホテル（名古屋駅前）

議　　題
1. 事業および会計報告
2. 本年度の予算案
3. その他

記念講演　演題は未定
大同製鋼研究所長・工博　浅田千秋氏

懇親会　総会終了後
会費　1,000円

（注）記念講演終了後大同技術協会第１回総会を開催いたしますので多数ご参加下さるようご案内申し上げます。

大同団結を!!

顧問　鈴木　馨

大同工業短大の創立委員に加えられたのは、昭和三十六年九月初めで、もう十年になる。四年生への脱皮から、創立時代の苦難を経て、現在の隆盛を見るまで、文字通り諸君と共に、苦難の道を切り開いて来た。同窓会にも短大第一回卒業式前に、会員の立案から組織の完成に参画したので、同窓会の親のような気持ちで、その生長を心から念願している。

本年五月と七月に前後十日ばかり、東京の尚志会館で厄介になった。そこは私が、浜松中学、広島高師、京都帝大と修学を続けた、広島高等師範の同窓会が経営している東京での活動の本部で、諸種の会合や、地方から上京する会員、縁故者を一泊三百円（他に寄付金若干）で泊める施設である。五月には老夫婦で一室占領、七月には六日も一室独占、ふところの心配なしに、手回り品を安心して放置できる、わが家同然の生活。これが同窓会のもつ、何ともいえない親愛感、兄弟愛の発露だ。ふろ場で語る人が、大正十一年と言う。それでは先輩か、と尋ねると、その年の生まれで、私と二十二の差がある。新制広島大学の卒業生などは、半分他人のような関係だが、ただヒロシマというだけで兄弟愛感がわく。ふろ場では、気がねなしに下着を洗う。食堂では、若い人が研究テーマを持って上京、特殊図書館での今日の収穫を物語る。内閣、宮内庁その他特殊研究施設には、かなり広く知人があるので、及ばずながら助言もする。血のつながる同窓のありがたみを五十年近い年輪の差を忘れて、しみじみと感じた。

私どもの同窓会は、生産性とは無関係な、国民文化の向上に寄与することを目標とした教育に関したものだけに、主として学校教育、社会教育という、限られた部門で働いているので、まとまりがよい。全国至る所に散在し、府県ごとの支部結束も固く、社団法人組織で運営され、愛知県には四五〇人も会員がある。年次別、地区別、職種別さまざまの集会が、毎年開かれる。研修、人事交流はもちろん定年退職後の身のふり方にも本気になって考えてくれる。

同窓会の効果を、身にしみて感じるようになったのは、六十才をこえてから。特に大同の職員として、学園のために働く上で、非常に役立った。学生募集に、就職のせわに、短大時代は東海三県、のちに静岡県をも担当したが、訪問するどの学校にも後輩がいる。中学の大先輩（卒業後五十一年）という先生もおれば、京大卒と名のる先生もあり、血のつながりだけで、話がトントンと進む。現理事長から、どうやって集めてくるかとお尋ねを受けたことさえある。自力ではない、みな同窓諸君のご協力のおかげである。人生七十を迎えて、ほんとに同窓のありがたさ、組織の力を痛感している。

時勢の波に乗って、今こそ引く手あまたの工大卒だが、第一回の卒業生の就職には、何をしているのか、と内部から批判されるほどの就職難だった。四年制になり、年輪がふえるのに比例して、卒業生諸君が職場で盛実に活躍してくれるおかげで、大同工業大学の声価が、一年まして増大的に高まって来た。入学志願者が多すぎて困るほどで、新館建築のくい打ちが八月に始まった。

四年生の倫理学の授業には、よく同窓会のあり方について話す。個々の力は弱くても、それが一つに固まって組織をもち、集団の力になれば、無限の強さになる。日新の技術界に適応してゆくのには不断の研修、努力が必要だ。棺桶に両足つっこんだ私が、今、日々横文字の典籍と取組んでいる。若い諸君は二度と来ない若さを、十分活用して大同技術協会なる組織を通じて、共同研究を続けて頂きたい。常に同窓会本部と連絡を緊密にし、連絡のあり方に意意の批判を寄せ、職場の動向を伝え協同一致、もって技術界に大同工業大学の存在を誇示できるよう、団結して前進しようではないか。

大同技術協会と共に

昭和四十四年七月六日、学生を愛することは考え無条件であった錦織学長が逝去されてもう一年以上が流れました。

国立大学にない自由な、そして産業界と良好な関係を持つ、特色ある大学作りをめざし、数々の構想を具体化しつつありました学長がその完成を見ずに他界されたことは、今もって残念でたまりません。

大同技術協会は、そのような故錦織学長の構想の一つで「実のある本当の教育を」を目標とし、実行され、その実が豊かに結ぶようにと具体的に提案されたものです。私たちの将来を思う愛情から生まれたこの協会を立派に育てあげ、温情に報いると共に、われわれは先生の人格を大学の魂として後々までに語り伝える義務があるのではないでしょうか。

会の具体的運営方針ですが、学内、学外より二十数名の有志を募り、本年五月より数度にわたり会議を持ち、口角泡を飛ばして語り合ってまいりました。その詳細につきましては、「大同技術協会のご案内」という形で卒業生の皆さまに連絡致しましたが、この紙面をおかりして、十分お伝え出来なかった内容を補足してご連絡致します。

技術協会は、現在名古屋、東京、大阪と三つの支部を持っておりますが、必要に応じて卒業生が就職した各地区に支部を設けたいと考えております。この支部活動を通して先輩と後輩のつながりを深め、技術の進歩とともに失なわれていくとしが思えない人間性を取り戻していきたいと思います。活動内容は、技術レベルの向上を意図する会合が主体となりますが、当初はもっと自由な懇談会的内容でもよいと考えます。

又将来、技術協会は、時代に即応した技術部会を設けようと意図しています。故学長は協会を産学協同の一つのユニークな形にしたいと述べておられました。この技術部会はその方向に沿う形で、学内の先生、卒業生、さらに在校生、一般産業界の専門家の方々に参加していただき、仕事を密接した、血となり肉となる情報の交換をはかりたいと思います。

大同技術協会を、先輩と後輩、先生と卒業生、大学と産業界を結ぶ太いパイプに育て、ことよりあふれ出る滋水を、私たちは成長の貴重な糧として日々の仕事のうえに顕現すると共に伸びゆく産業界に力強く貢献して行こうではありませんか。

同窓会だより

新美　一博

同窓会の歩み

鈴木　馨

三十九年初頭、学生部長だった私は第一回卒業式を控えて、卒業生団結のため同窓会組織に直面し、服部、上森両教授などに謀り、母校尚志会の規約を骨子として、同窓会規約を立案した。会の名称を一橋大の如水会のような別個のものにと考えたが、教授会で大同工業短期大学同窓会と決定した。四年制の卒業生が加わることになって、短期の二字が消えた。

三十九年三月二十五日卒業式後に会則案を配り、全員入会とし、その十一月二十三日の第一回総会で形式的に完全な会を整えた。初代理事長には相羽弘次君が選任せられた。まだ旧校舎だったので、総会は高校舎館だった。

四十年三月大竹浩君が卒業とともに、事務局長を担当し、四年間独力で会務に奉仕してくれたので、会活動の源動力になる多彩が二回も発行ができた。総会も四十年から新築の本館で十一月中旬の日曜に開き、会務報告等の外、学界、業界の名士の講演を聞き、母校教職員と歓談した。大同製鋼林副社長、佐藤名工大学長、本学関口教授のお話が印象に残っている。

昨年は学園生みの親、錦織先生を亡い寂しい限りであったが、成田現理事長兼学長を名誉会長にお迎えすることができた。会の理事長も相羽君から山野清市君に、事務局長も大竹君から杉浦正勝君に交代があり、やがて角谷謙二君にバトンが渡される。

四十二年三月卒業生提案の大同技術協会が開店休業の状態だったが、同窓会の事業として、杉浦正勝君を中心に活発に動き出す運びになり、成果が期待せられる。

同窓会の七年間を回顧して、事業らしいものは、総会だけに終わった観がある。母校に残った会員も、激甚な本務の余暇に、学生部のご協力下に執務するので、積極的活動としては二冊の名簿以外に掲げるべきものが残らない。専任職員を置くには、大学後援会から毎年ご援助下さる助成金では不可能事である。現有資産は多いように見えるが、終身会費だから、経理は早晩行きづまるに決まっている。

同窓会の日常活動を盛んにして会設立の本来の面目が立つようにするのには、会員諸兄の心からのご協力を仰ぐ外には方策がない。

ゼミハウスご案内

木曽駒高原の別荘地帯に母校のゼミナーハウスが建設され、学生および職員のみならず、卒業生にも開放されることになりましたので、そのご案内を致します。

この木曽駒ゼミナーハウスは、長野県木曽郡木曽福島町新開大原字正ノ平海一二八の三にあり、国鉄中央線木曽福島駅から東方約六キロ、木曽駒ケ岳の中腹に位し、標高約一、二〇〇M、西方に木曽御岳、北方に乗鞍、穂高の連山を、眼下にゴルフ場や別荘地帯を望み、眺望絶景、空気清澄な別天地にあります。

春夏は新緑、秋は紅葉、冬は一面の銀世界。スキー、スケート場が近く、四季を通して旅情をなぐさめるのに好適な場所にあります。

施設の内容は、木造二階建三三・二五㎡、二階は食堂兼ホール室、和室、管理人室、台所、ベランダ等からなり、一階は寝室兼の大室、浴室、スキー倉庫からなり冬期には暖房設備を備えてあり、五〇名収容できます。

使用手続きは、使用日の一か月前から七日前までに学生課に使用願を出し、許可を受けた後、使用料と食費を払込み、使用許可書を受取って下さい。

なお、使用許可書は、ゼミナーハウスに行ったときに管理人へ提出して下さい。

なお、一泊の週末利用プランの一例を示すと費用は二、五〇〇円くらい。

名古屋発　一四時四七分（木曽五号）
木曽福島着　一七時一〇分
発　一七時二〇分（バス・ゴルフ場行き）
ゴルフ場着　一七時三七分

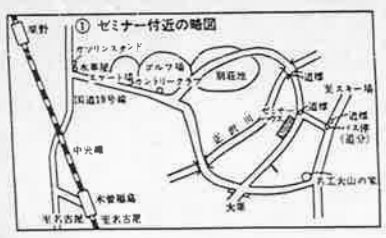
ゴルフ場より徒歩三〇分くらいでゼミナーハウスに着く。

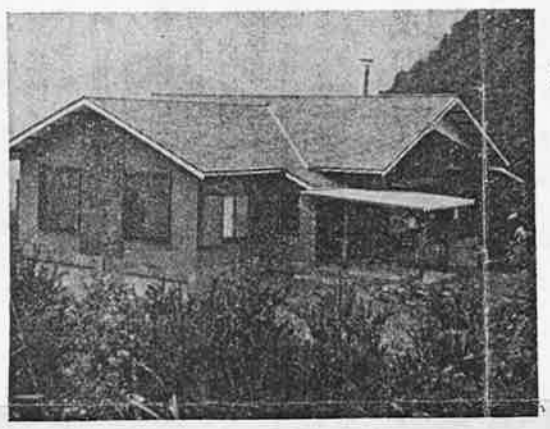
翌日は午前中附近散策の後、遅分発一二時二〇分のバスを利用して、木曽福島にもどる。夜遅く場合はタクシー（名タク）を利用した方が便利です。

使用料と食費

使用料（一人一泊）
大室　二五〇円
和室　四〇〇円
冬期（十一月～四月）は、採暖料五〇円加算
日帰り一人一〇〇円

食費
朝食　一〇〇円
昼食　一二〇円
夕食　二五〇円





木曽駒ゼミハウス全景

同窓会役員紹介

名誉会長	成田　米蔵	
顧問	鈴木　馨	
		（卒業年度）
理事長	山野　清市	（昭和三十八年短機）
副理事長	相羽　弘次	（昭和三十八年短機）
理事（書記）	小川　昭彦	（昭和三十八年短機）
（書記）	角谷　謙二	（昭和三十九年短機・四十二年大電）
（会計）	三宅　洋	（昭和四十二年大機）
（会計）	関谷　昌久	（昭和四十三年大電）
（庶務）	神谷　忠男	（昭和三十九年短電・四十二年大電）
監事	大竹　浩	（昭和三十九年短電）
監事	山田忠比呂	（昭和四十二年大電）
事務局長	杉浦　正勝	（昭和三十八年短電・四十一年大機）
評議員	石黒　昭平	（昭和四十一年大機）
〃	成田　邦義	（昭和四十三年大機）
〃	稲垣　昌弘	（昭和四十三年大機）
〃	愛知　久史	（昭和四十三年大電）
〃	関谷　昌久	（昭和四十三年大電）

編集後記

この同窓会報ができ会友の皆さまのお手許にお届けできることはわれわれ同窓会報編集委員一同としては喜びに堪えません。

ところで、今回創刊号発刊につき、迂余曲折はありましたが、一応形を整えることができましたのも、ひとえにお忙しい中を寄稿して下さいました皆さまのおかげと存じます。

昨年の総会においてこの同窓会報発刊をお知らせして以来、われわれに委託されたが、なにぶんにも皆一応の仕事についていることから、集会を開らくことすらなかなかできずその上、会報づくりの経験がないため、最初のころは何から手をつけてよいのかわからず時間の過ぎることばかりでしたが、しかしながらも原稿の依頼をしり校正その他編集にあたりやっと軌道に乗ったところです。

なお、この会報の題字は、わが同窓会の顧問であられる鈴木馨先生筆によるものであり特に同先生には今度の講演の件などについてもご厄介になりました。

最後に発刊にあたりいろいろと応援してくれた大同工大新聞会の諸君および学内の会友諸兄に対しましてお礼申しあげます。

編集委員

愛知　久史（昭和四十三年大電）
富田　和男（昭和四十四年大電）
野村　重信（昭和四十四年大機）

原稿募集

この同窓会紙を続刊していくためには、是非全会員の皆様方のご協力が必要です。下記の要領で原稿を募集致しております。

字数　600字
送り先　同窓会事務局（大同工業大学内）
編集委員一同皆さまの寄稿をお待ちしております。